御山詣テノ記（総本山多宝蔵格護・全八丁）

富士学報31号北陸信者登山伝考（大藪師）より転載

▼天保十一庚子四月十八日　我君江戸御發駕、東海道通リ御歸國　予モ陪從シテ歸ル　此時ヨキ折ナレハ富嶽ノ麓ナル本山ヘ詣テハヤト　兼テ思ヒモウケシ事ナレハ、此年正月ノ比ニヤ江戸小梅ノ　御寺ヘ詣テ日量尊師ヘ見エ侍リシ折カラ當年ハ　大守東海道ヨリ歸國ノ沙汰有之候　イマダ申渡シハ無之候得共弥々左様ナレハ　御山ヘ詣テ度思ヒ侍ルナド御咄申上シ処　量師仰ラレシハ　夫ハ尤ノ事ニテ候　サレド勤仕ノ身ニテハ能々都合ヲ考ヘ人ニ咎メラレヌ様ニセラレヨ　カマヘテ卒忽ノ振舞ナキ様ニセラルヽ事肝要ニテ候ト仰ラル①其後東海ノ命モ下リケレト　何カ指障ノ事モアリトカ▼聞ヘテ　御發駕御延引ト　仰出サレ　サテハ人口　詢々東西何レノ方ヘ首途スヘキヤナト　日々ノ風評モイツシカ過行テ　弥十八日品川ノ方ヘ足ヲアグル事トハナリヌ又予ガ②同僚ノ道中ノ勤モ數アル中ニ　少シク暇ヲ得ヘキハ馬渡ト云ヘル役ナレハ　何卒馬渡ノ役ニ入リ度　外役ニテハ迚モ思ヒ絶タル事ト心ニ念シ居タリシニ不レ計モ道中役付ノ令下リシ時　予ハ馬渡ノ役ニ命セラレヌ　心ノ中ニハ③雀躍ニタヘス　爰ニ予カ同役ヘ加人トシテ　道中功勤候者五人ハカリアル中ニ　池森量體俗名吟左ヱ門ト云ヘルハ同行ノ人ナレハ密々ニ約シテ予ト池森今壹人楢葉何某同宿ノ事ニハカライ折ヨクハ楢葉ヘヨキニ言コシラヘ参ラハヤト思ヒ居タリ　④四月ノ十日比ニヤ又小梅ノ御寺ヘ▼参リ　量尊師ニ見エ御暇乞ニ参リ候ト申上シ処上人仰ラルヽハ　御大守ニモ弥東海道　御通行ノ由サスレハ先日申サレ候通　本山ヘ都合ヨクハ詣テラレ候事尤ニ候　夫ニ付吉原ノ驛ヨリ　本山ヘ詣テ候道ニ富士ノ本宮ニテ淺間ノ社ト云ヘルアリ此宮ヘ参ル由ニ申セハ人モ怪ミ不申マヽ左様ノ事ニハカライ申サルヘク　⑤サテ三島ヨリ由井ノ御泊付ノ由　道程モ余程ハリ申マヽ隨分精出シテ参ラルヘク　吉原ノ驛ニテ脇本陣野口曾右ヱ門ト、三度屋金藏ハ當門檀下ニテ候マヽ此処ヘ立ヨリ申入ラレ候ヘハ　案内者モヤトヒクレ可申マヽ左様致サルベク　尤各都合ニヨリ詣テラレ候事モ　本山ヘ申遣シ置候ヨシ仰ラレ　⑥ヤカテ御暇申上カヘリヌ　サテ十八日弥　御發駕▼神奈川御泊十九日藤澤廿日小田原廿一日三島ヘ昼八

天保十一年（一八四〇）庚子四月十八日、我が君が国許にお帰りになるために江戸をご出発され、東海道を経由してご帰国された。自分もお供をして帰国した。この際に、よい機会であるから（参勤交代で東海道を経由するということは滅多にないので）富士山麓の総本山へ参詣したいと予てから考えていたので この年の正月の頃であったか、江戸小梅のお寺（常泉寺）へ参詣し48日量上人に御目通りした際、「今年は殿様が東海道経由で帰国されるとの報せがありました。いまのところ（行列における役割について）命令はありませんが、本当に東海道を通行することになれば、総本山へ参詣いたしたいと存じます」と申し上げたところ、日量上人が仰せられるには、「それはもっともなことです。しかしながら、（金沢藩士としての）勤めがある立場なのですから、よくよく都合を考えて、他の藩士から咎められることないようにされますよう。決して軽率な振舞いをなさらないようにすることが肝要です」と御指南下された。

①その後東海道経由で帰国するとの通達があったが、何か支障があったらしく殿様（大名行列）の出発は延期となった。そのため、家臣の間では（本郷の上屋敷からみて）通常のルートである東（中山道・北国下街道ルート）へ向かうのか、はたまた通例に違い西（東海道・北国上街道ルート）へ向かうのかということで、うわさ話が絶えなかったが、いよいよ（四月）十八日に品川（東海道）へ向けて出発することになった。

また、自分たち②藩士の道中の役割も多種に亘るが、その中でも時間的に余裕を持って勤められるのは馬渡という役目であるから、「なんとしても馬渡の役に入りたい。そのほかの役では（本山参詣は）とてもおぼつかない」と心配していたところ、はからずも道中役割についての命令は馬渡の役であった。まことに③小躍りするばかりの心持ちであったが、そうしたところ、自分と同じ役目を命じられた者が五人ほどいる内、池森量體（俗名は吟左ヱ門）という同じ富士派の信者がいたので、密かに（本山参詣を）約束し、他に楢葉という者が同宿であったので、楢葉には頃合いを見計らって、うまい口実を設けて（大石寺へ）参詣しようと思っていた。

（十八日の出発を間近に控えた）④四月の十日頃、再び常泉寺へ参詣し、日量上人に御目通りをしてお別れの御挨拶を申し上げたところ、日量上人の仰せられるには、「殿様におかれてはいよいよ東海道を御通行（にて帰国）とのこと。ならば先日（あなた・菅野氏から）お話のあった通り、都合がつけば本山へ参詣されるがよろしいでしょう。それについてですが、吉原宿から本山へ向かう道中に富士山の本宮である浅間神社という社があります。この神社へ参詣すると言えば、他の藩士から怪しまれることもないでしょうから、そのように言ってみてはどうでしょうか。

ところで、（行列の本隊は）（四月二十一日）⑤三島から（同二十二日）由比へと宿泊予定とのこと、（行列が三島から由比へ移動する間に抜け出して本山へ参詣することは）道程も大変長いので、頑張って登山参詣されますよう。吉原宿には、脇本陣の野口曾右ヱ門と三度屋金蔵という者がおり、彼らは当門の檀家ですから、ここへ立ち寄り（本山参詣について）申し入れられれば、案内人も雇ってくれるでしょうから、そのようにされるといいでしょう。尤も（行列に加わっている金沢の信徒方が）各々の（道中の勤めの）都合によって（三々五々）参詣される

半時比ツキヌ　池森モ先ニ着居ケル侭　宿ヘ申付手早ク
一飯タベ　サテ楢葉其外同宿ノ割場方三人ノ者ヘハ⑦大
宮淺間ノ社ヘ参リ度侭　只今ヨリ出立イタシ候　跡ノ事ハ
ヨキニハカライ給リ候様タノミ置　池森ハ今晩三島驛當
番ノ処　昨晩小田原驛ト振替置　予ハ明日吉原驛當
番ノ処　兼テ同僚吉川某ヘ頼置　先ハ心ニカヽル事モナケレ
ハ何氣ナク二人連ニテ宿ヲ立出　驛端ヨリハ⑧イソキニ急
キテ行程ニ吉原驛マテ六里半ト云ヘル道ヲ　夜ノ五ツ比
ニモヤ脇本陣野口曾右ヱ門方ヘツキ案内申入ルヽ処亭主
取アヘズ立出　能コソ御出ニ候　先々暫時御休息トアツテ
坐敷ヘ通シ　サテ亭主申ハ　兼テ諸君御参詣ノ事
▼三表申参リ居　其心得ニテ御待申候又　御山ヨリモ御迎ヘ
トシテ御出家一人下男両人斗見エ居申候　早速御シ
ラセ可申トテ人ハシラセテ案内スルヤ否見エラレ候　⑨御出
家ハ兼々小梅ニテ見知リ申　唯信御坊トテ年ノ比六十ニモ
近キヤ皃ツキ滑稽ニテ底意ナク咄ナドスル人ニテ申サル
ルハ我等此節ハ　本山ニ用向有之逗留イタシ居候処各御
参詣ノ事　上人御聞ニテ加州ノ信者ノ能ク見知レル者ハ
其方ナラテハナキマヽ大義ナガラ迎ニ出テ呉候様仰ラレ
下男両人召連今夕是迄参リ居候　⑩先刻夕七時比五人
連ニテ見エラレ候方々有之下男一人案内者トシテ付テ
進ラセ候各方ヘモ今一人ノ下男ヲ付テ進ラセ可申山道
ニテ紛ラハシク案内者ナクテハ道ノ損モ有之侭可被召連候
▼三裏サテ御労レニ候ハン侭今晩此処ニ御休ミ明曉御出立被
成候得バ　宜候得共左アリテハ遅刻ニ相成可申侭今ヨリ
直サマ御出立可有之候　尤駕籠ニテモ御用ニ候ハヾ亭主ヘ
可申入トテ何角人ナト走ラセテ　漸⑪宿駕籠二挺ヤトヒ
クレ候処ヘ同行ノ角間何某𨻶𨻶𨻶ハモ來リ共ニ参ラント云支
度ナドトヽノヘ又隣家ノ三度屋金藏方ヘ同行吉村何某
𨻶𨻶𨻶ハ門先刻参リ居候ニ付　人モテ一集ニ参ラルヘクヤト申
遣シ候処只今休ミ候マヽ追付跡ヨリ可参先無構参リ
候様申越　⑫池森角間予三人連ニテ吉原ノ宿立出シ時
ハ早九ツノ廻リ來リヌ　サテ唯信房ノ申サルヽハ是ヨリ山中
ノ事故　夜半腰ヲ掛可申茶屋トテモナキ侭　此処ヨリ
二里計行テ小泉村トカ云ヘル村ニ檀家ノ信者有之侭其
▼四表処ヘ御休息可有兼テ此等ノ事モ　上人ノ仰付ラレニテ
其心得イタシ居申ハヅノ旨申サレ案内者ノ男ヘモ呑込テ

ということも本山へ伝えておきましょう」と仰せられた。⑥そして自分は上人にお暇を申し上げて帰途についた。

さて、四月十八日いよいよ出発し（この日は）神奈川宿に泊。十九日藤沢、二十日小田原泊、二十一日午後三時頃、三島に着いた。池森も先に着いていたので、宿の者へ申し付けて取り急ぎ食事を済ませた。そして楢葉、その他同宿の割場方の三人の者に⑦「大宮（現在の富士宮市大宮町）浅間神社に参詣したいので今から出発する。あとのことは宜しくお取り計らいの程を」と頼んでおいた。池森は、今晩三島宿の当番であったところを昨晩の小田原宿当番と交代し、自分は明日吉原宿当番のところを事前に同僚の吉川某に交代してもらっていたので、後顧の憂い無く池森と共に出発した。

三島宿のはずれからは⑧急ぎに急いで、吉原宿までの約二十六キロの道矩を行き、午後八時頃、脇本陣の野口曾右ヱ門方へ着き案内を申し入れたところ、宿の主人がすぐに出てきて「ようこそおいで下さいました。兎にも角にも暫く御休み下さい」といって、座敷へ通された。すると主人は、「予めあなた様方が本山へ御参詣されると伺っておりましたので、そのつもりでお待ち申し上げておりました。また御山からも御僧侶が一人、下男が二人ばかりお迎えに来ておられますので、早速お知らせいたしましょう」と、使いの者を走らせたところ、僧侶方は直ぐに見えられた。

⑨御僧侶はかねてから常泉寺にて顔見知りの唯信房という方で、年の頃は六十にも近いだろうか、親しみのある顔つきの方で底意なく話をされる方であり、この御僧侶のおっしゃるには、「私どもはこのたび本山に用事があって滞在していたが、あなた方（加州の信者）が（総本山に）参詣されることをお聞きになった51日英上人が「加州の信者のことをよく見知っている者は其方以外にはいないから大儀であるが迎えに出てくれ」と仰せられたので、下男を二人連れて今夜はここまで参りました。

⑩先ほど午後四時頃にも五人連れで来られた方々があったので、下男を一人案内者としてお供させました。各々方にももう一人の下男を（案内人として）お供させましょう。（総本山への道中は）山道でわかりにくいので案内者がいなければ道に迷うこともあるでしょうから、連れていって下さい。▼（この日は小田原から吉原への移動で）疲れているだろうから、今晩はここでお休みになって明朝出発された方がいいのでしょうが、それでは行列に戻るのが遅れてしまうでしょうから、今すぐに出発されますよう。もし駕籠を使われるのであれば宿の主人に申し入れましょう」と言って使いを走らせて、⑪宿駕籠二挺を用意して下さった。

そこへ同信の角間という者（俗名武太夫）も来て、一緒に参ろうというので支度を整え、また隣家の三度屋金蔵方には同信の吉村という者（俗名數ヱ門）が先だって来ていたので、一緒に行かないかと問うたところ、「今、休憩している。おっつけ後から行くので、構わず先に行ってくれ」ということであったので、⑫池森、角間、自分の三人で連れ立って出発した頃には、既に午前零時を過ぎていた。

（出発にあたり）唯信房の言われるには、「これからの道中は山中にて、夜中のことでもあり腰掛けて休むような茶屋もありませんが、ここから八キロばかり行った小泉村というところに檀家の信者がおられますので、そこでお休み下さい。このことは（その檀家の信者も）前もって猊下様から仰せつかって

ヤ立出シニ⑬富士ヲロシノ夜風　時ナラヌ寒サ肌ヲ通シアサ
マナル宿駕籠ニフラレナガラモ労レタル侭夢ウツゝニ小泉
ノ村ヘツキヌ　サテ申付ノ百姓家ヘ着ケレハ若キ夫婦老タル
婆々立出子ンコロニモテナシ酒菓子ヤウノ物出シケレト寒サ
ノ餘リ何カハヲキテ薪折クベサセテ　イロリヘ踏込アタリヌ
サテ此処ヘ又御山ヨリ檀家ノ者トテ一人出迎　上人
ヨリ仰付ラレニテ山中タベ物トテハアルマジクトテ銘々ニ
辨當ヲモタセクダサレニシメヤウノ物マデ取ソヘ御丁寧
ノ御アツカイ難有サノマゝノコリナクイタゞキ腹モ□□□
⑭焚火ニモアタゝマリヌ　イザトテ此家ヲイトマツゲテ立出
▼四裏又駕籠ニユラレテ行ユク程ニ夜モアケテ朝ノ五ツ過ニヤ
大御寺ノ門前ニツキヌ　ヤカテ駕籠ヨリ立出シニ先達テ
參リシ五人ノ同行ハ下向ニテ逢ヌ大組ノ人ナル由ハシラズ五人共⑮サテ案内
者ノ下男誘引ニテ寂日御坊ヘイタレハ洗足ノ湯ナトモテ
来リ坐敷ヘ通レハ寂日　御房出ラル年ハ七十ニモ越タリトカ
申サレ寺役ノ事ハ光雲御房トイヘル若キ御出家ニ譲ラレ候
由ニテ光雲御坊モ出ラレ何角子ンコロニアイサツアル此御坊ハ
イマタ年若ナレトサカシケナル人ニテ先茶ナド可被召　ヤガテ
半鐘ナリ候ヘハ⑯御宝藏ヘ御案内可申トテタバコナト呑居
上人ヘノ供物取出シ御披露ヲ頼ミナトスル処ヘ無程半鐘ノ
音ニツレテ光雲御坊ノ誘引ニテ　御宝藏ノ前ヘイタレハ
上人其外ノ役僧衆小僧達ニ至ル迄　御宝藏ヘ詰ラル跡
▼五表ニ付テ入リシニ御役僧三人計立會ニテ　御本尊ノ鍵ヲ開
玉フ此⑰御本尊ハ三重ノ　御祠ニ入玉ヒ鍵モ夫々請取ノ御
役僧有之由ニテ御立會ノ上ナラテハ明キ不申由　サテ
上人ハ正面ノ高坐其外役僧中ハ両側ニ居ナラビ小僧中ハ後
ニ居ナラヒ其後ロニ我等三人ウツクマリヌ　ヤカテ御經始リ
方便品壽量品一遍其後御題目数遍御唱ヘ終テコナ
タヘ　御向ヒニテ我等三人エ御回向被下夫ヨリ上人仰ラ
ルゝハ⑱是コソ万年救護ノ御本尊ニテ候何レモ拝セラレテ
本懐ヲトケラルベク候又向テ左ノ方ノ御祠ハ　大上人ノ
御骨ニテ要メノ処ヲ集タルニテ餘寺ニモ有之ナド申候
得共正真ノ　御骨ハ當山ニ限リ候又向テ右ノ方乃御祠
ハ　大上人御在命ノ節　日法上人ヘ仰付ラレ板　御本尊ノ
▼五裏木ノキレニテキザマセ玉フ　御像ニテ　大上人御髪ノ毛
ヲモテフスベ　御自身御掌ノ上ニノセ玉イ能ク似タリト仰
ラレシ御像也皆々近ク寄テ拝セラレヨト仰ラレ又高坐
ノ上ノ打敷トカ云ヘル物ニ梅鉢ノ　御紋アリ　上人御指サシ

承知している筈です」とのことで、これについては案内者の下男も承知しているらしく、ともかく出発した。道中、⑬富士おろしの夜風、季節はずれの寒さが肌を刺し、粗末で、むき出しの駕籠にゆられながらも、疲れていたので夢うつつの体で小泉村に到着した。

唯信房から聞いていた農家に着くと、若い夫婦とお婆さんが出てきて丁寧にもてなしてくれ、酒肴を供してくれたけれども余りにさむかったので、薪をくべ、囲炉裏にあたって暖をとった。

そこへまた、檀家の者が一人出迎えに来てくれて、猊下様よりの言いつけであったとのことで、山中ゆえ食べ物とて無いだろうと、銘々（同行の三人）に弁当を用意してくれた。煮しめのようなものまで添えてくれてあり、この丁寧な御配慮に感激して残さず頂戴した。

空腹も満たされ、⑭焚き火にあたって体も温まったので、さあ出発だとばかりに農家に別れを告げ、再び駕篭に揺られて行くうちに夜も明け、午前八時過ぎ頃か、大石寺の門前に到着した。

そして駕篭を降りると先に参詣していた五人の同信の藩士たちが下山するところで出会った。名は知らないが大組に所属する人とのこと。

⑮さて、案内者の下男に従って塔中の寂日坊へ行くと、洗足の湯をもってきてくれた。そして座敷に上がると寂日坊の御住職が出てこられた。歳は七十歳を越えたとのことで、坊の実務は光雲御尊師という若い御僧侶に譲られたとのこと。そこへ光雲師も見えられ何かと丁寧に挨拶をされた。この御僧侶は若年ではあるが立派な方で「先ずは御茶を一服どうぞ」と言われた。

⑯（光雲師は）「そのうち半鐘が鳴りましたら（それが御開扉の合図なので）御宝蔵に御案内致しましょう」と申されたので、タバコを吸ったり、猊下様への御供養の品々を取り出して御披露をお願いしていたところ、程なくして半鐘が鳴ったので、光雲師の案内に従って御宝蔵の前に行くと、猊下様、その他の役僧の方々、小僧さんたちに至るまで御宝蔵に詰めていらした。その後ろに付いて中に入ると、三人の御鍵取りの御僧侶の立会のもと、御厨子の鍵が開けられた。

⑰この御本尊は三重の祠に御安置されており、御厨子の鍵もそれぞれ管理役の役僧が居られるとのことで、その方々の立会のもとでなければ御開帳は出来ないとのこと。

さて、猊下様は中央の高座に、その他の役僧方はその両側に着座され、小僧さんたちはその後ろに着座されて、その後ろに自分たち三人は着座し伏せ拝をした。やがて御経が始まり、方便品・寿量品を一遍読み、その後お題目を数遍唱え、それが終わると（猊下様は）こちらに向き直られて、自分たち三人に御回向下された。

それから猊下様の仰せられるには、⑱「これこそ末法万年の衆生を救護せられる御本尊であります。どちら様も拝せられて本懐を遂げられますよう。また、向かって左側の祠に安置せられたるは大聖人様の御灰骨であります。余所の寺にも（大聖人の御真骨が）あるなどと言っているところがありますが、正真正銘の御遺骨は当山にしかありません。また、向かって右側の祠に安置せられたるは大聖人の御在世の頃、日法上人に仰せつけられて、戒壇の大御本尊に使用された楠の切れ端に彫刻された御影像で、大聖人の御剃髪を焼いて灰にし、彩色申し上げたものであります。大聖人御自身もこの御影像を掌に載せられ、よく似ていると仰せられた御影像でありま

是ハ壽正院様ノ御寄附ニテ候ト仰ラル⑲夫ヨリ又光雲御坊ノ誘引ニテ 御本坊ノ書院ニ至レハ上坐ニ 上人坐シタマヒ
三人共ニ近ク參リ候様仰ラレ向テ左ノ方ヘ予ト池森右ノ方ヘ光雲御坊ト角間坐ツキヌ坐定リテ 上人銘々ニ御會釈有之仰ラルゝハ菅野氏ニハ久シクテ逢マシタ池森氏ニハ初テ逢マシタ角間氏ニモ久シクテ逢マシタ 何レモ御無事テ珍重テゴザルサテ此度ハ 御大守御供ニテ御旅行大儀サゾ繁勤ノ内ヨクコソ參ラレマシタ⑳何レモ御供養ニ預リ忝▼六表ク候久々ニテ盃ヲ進ラセ候トテ銘々ヘ御盃ヲ被下夫ヨリ麁抹ナガラ齋ヲ申付候侭給ラルベク トテ御膳ヲ御出シ被下 上人モ光雲御坊モ 一集ニ被召上品々御丁寧ニテ二ノ膳マテ付大抵二汁七菜計ノ御齋ナリ㉑サテ仰ラルゝハ何モ進ラスヘキ品ハ無ケレン是ヨリ蒲原驛ヘ出ラレ候迄ハ猶更山中ニテ食物モ不自由ニ候侭トクトスゴサルヘク酒モ用ラレ候方ハヨキニスゴサレ申サルヘク ナド子ンゴロニ仰ラレ難有サノ侭予ハ汁椀ノ蓋ニテ二献給ベ池森角間ハ下戸ニテタベズサテ品々結構ノ御モテナシ恐入候段申上シ処 上人仰ラルゝハ イヤトヨ馳走申度ハ山々ニ存候得共カゝル山中ナレハ思フ程ニハ行届カス候㉒サテ各參詣セラルゝ故道中無障碍ノ祈念モ申入候侭 御大守御旅中御無難ノ御祈
▼六裏念モ申入レ候是ハハカラズ各方ノ忠節トモ相成候サテ久保田詮量ハ參詣イタシ候ハヅニヤト 御尋ニ付昨日逢申ニ付尋申処 主用繁多ニテ參ラレマジク由ニ申候ト申上シ処夫ハノコリヲシキ事デゴサルシカシ左様ノ繁勤ノ人ハ無理ナル事ヲシテ參詣イタシ候ヨリ參ラヌ方ガ我等ニ於テモ安心ニテ候ナド御咄ニテ御洗米一包御數珠一連宛被下數珠ハ麁抹ナレン開眼モイタシ置候侭持參アルベクト仰ラレ頂戴イタシ候㉓処ヘ吉村何某俗名右ヱ門參リ候由 取次ノ出家申上ラレ是ヘト仰ラレ無程吉村 御前ヘ出 一通リノ御アイサツ済テサテ吉村ノヲイナル者小僧トナツテ居申ヲ御サシ彼者モ近比剃髪サセ名モ泰瑞ト付テゴザル隨分小僧仲間ニテモヨロシクアノ通リナレハ安心セラルヘクナド子
▼七表ンゴロニ仰ラル 吉村ハ難有サノ餘リニヤ落涙ニムセビタルモ尤ト見ヘ侍ル ㉔ヤカテ光雲御坊我等三人ヘ登山シ玉ヘト進ラレ彼御坊ニシタガヒ客殿カト覚ヘ侍ル 御座替リノ 御本尊トテ 興師ヨリ目師ヘ御讓リノ 御本尊也常ノ御本尊ト違ヒ右ノ方ニ興師ノ御名判アリテ左ノ方ニ目師ヘ御授与ノ趣ニ御シタゝメ也 是ヲ拝シ夫ヨリ經堂鐘す。皆様方も、近くに寄って拝されよ」と仰せられた。

また、高座の上の打敷とかいうものに梅鉢の御紋があり、猊下様がこれを指さされ、「これは壽正院（勇姫）様よりの御寄附の品です」と仰せられた。⑲それからまた、光雲師の案内にて大坊の書院に行くと、上座に猊下様がお座りになり、「三人とも近くにおいでなさい」と仰せられ、向かって左側へ自分と池森、右側へ光雲師と角間が座った。全員が着座すると、猊下様は銘々に会釈され、「菅野氏には久しぶりにお会いしました。池森氏には初めてお会いしました。角間氏もお久しぶりです。どちら様も御無事で何よりです。さて、このたびは殿様のお供にての御旅行ご苦労様です。さぞお忙しいお勤めの最中でしょうに、ようこそ参詣されました。⑳いずれの方も尊い御供養をされ、誠に有り難く存じます。久しぶりですので、盃を差し上げます」と仰せになり、銘々へ盃を下されて、「それより、粗末ですが食事を用意させましたので、どうぞ召し上がって下さい」と、お膳を用意して下さり、猊下様も光雲師も一緒に召し上がられ、そのお膳も品々とても丁寧で二の膳まで付き、二汁七菜もの食事であった。

㉑そこで、猊下様がおっしゃるには、「何も召し上がって戴くほどの物はありませんが、ここから蒲原宿に出られるまでは尚更山中のことですので、食べ物にも不自由されるでしょうから、どうぞ遠慮なく充分に召し上がられ、お酒も召し上がられる方はこれまた遠慮なく召し上がって下さい」と親切に仰せられ、余りの有り難さに、自分は汁碗の蓋で二献ほど戴いたが、池森、角間は下戸なので戴かなかった。

自分は、「いろいろのお品、心づくしのおもてなしを戴き、畏れ多いことでございます」と申し上げたところ、猊下様は、「もう勘弁してくれというほど御馳走したいのはやまやまなのだけれども、このような山中なので思うほどには行き届いたもてなしが出来ないのです。㉒ところで皆さんが参詣されましたので道中御無事でありますように御祈念も致しました。また、殿様の御旅行中の御無事も御祈念申し上げました。これは、（行列を抜け出したことは殿様への不忠になるかと懸念されているかも知れないが）はからずして各々方が殿様への忠節を尽くしたことになるでしょう」（と仰せられた）。

「ところで久保田詮量氏は参詣されなかったのですか」と、猊下様からお尋ねがあったので、「昨日（久保田に）会って聞いたところでは、殿様の用事で忙しいので参詣できないとのことでした」と申し上げると、「それは残念なことです。しかし、そのように勤めが忙しい方が無理なこと（抜け参り）をされるよりは、参詣されない方が私としても安心です」と仰せられた。そして、自分たちに御洗米を一包、御珠数を一連ずつ下さり、「珠数は粗末だけれども開眼供養をしてあるのでお持ち帰り下さい」と仰せられたので、有り難く頂戴した。

㉓そこへ（吉原宿で行き会った）吉村が来たと、取次役の御僧侶が申され、猊下様は「どうぞ」と仰せられ、程なく吉村は御前に進み出て一通りの御挨拶を申し上げた。猊下様はそこで、吉村の甥で小僧として御山に上がっている者を指さされ、「あの者も近頃剃髪させ、道号を泰瑞とつけました。小僧仲間とも随分仲良くしているようで、あの通りですから安心されますよう」と、丁寧に仰せられた。吉村は有り難さが極まったのか、むせび泣いてしまったが、これも尤もなことであろう。

㉔そして、光雲師から自分たち三人に対し、境内の

樓学寮御墓所其外ノコリナク拝見イタシ元ノ書院ヘ立
歸レハ吉村ハ御盃ナドイタゞキ御齋（とき）モタベ㉕御宝藏ヘ參詣
ノ由ニテ光雲御坊申サルゝハ只今吉村氏　御宝藏ヘ拝セラ
レ候各方ニモヨキ折ナレバ今一遍拝セラルヘキヤト申サレ三人共
又　御宝藏ヘ出　二度拝シ奉リヌ㉖夫ヨリ吉村ハ光雲御房ノ
誘引ニテ登出シ三人ハ書院ヘ歸リ寂日御坊光雲御房ヘ
▼七裏送リ物并迎ノ男ヘ心付ナドコシラヘヤカテ吉村モ歸リ來ニケル
侭夫々送リマイラセ又寂日御坊ヘ立寄リ爰ニテ芒鞋（わらじ）
ハキ兩御坊ヘ暇（いとま）申テ立出シハ昼前ノ比ニヤ有ケン又送リ男
ヲ付ラレシ侭此男ヲツレテ立出ツ㉗道ノ程夜中通リシ折ハ
駕籠ニテ眠リナカラ來リシ侭シカト覚ヘハナケレト今マノ
アタリ歩ミ行ケバサシテ難処ト云程ノ事モナケレト山又山ニ
テ中々案内者ナクテハ紛ラハシキ道モアリテカゝル山奥ニ
目出度霊場ノアルヘキトハ誰カ知ルヘキト思ハル㉘ヤカテ二
里計モ來ラント思フ比　駕籠ニテ來ル者誰ソト見レハ今川
何某俗名三碩ニテソアリケル是ハ三嶋ノ本陣ノ御用繁多ニテ
夜半ニヒマヲアケ夫ヨリ詣テ侍ルヨシ今壱人永井何某
俗名久左ヱ門モ本陣御用相濟次第參詣スヘキ由ナリシカ如何ヤ
▼八表ラント尋シニ今川モ其様子ハ知ラズト答フ㉙夫ヨリ立別レ案
内ノ男モ無程（ほどなく）返シ四人連（づれ）ニテ　ツトゝ歩ミ富士川ノ
渡頭ニテ本街道ヘハ出ヌ　ヤカテ川ヲ渡リ蒲原ノ驛ヲ
通リヌケテ由比ノ御泊宿ヘ着シハタ七半時ニモヤアリ
ケン暮ルゝニハ間モアリケル楢葉其外ノ人々モ先達テ着
居淺間ノ社ハ如何ナル処ナルヤト問フ　カゝル事モヤト思ヒ
御山ヨリカヘルサニ淺間ノ社ヘ立寄有増（あらまし）見來リシ侭咄（はなし）
物（もの）スルニモ都合ヨカリシ㉚右ノ道程ハ凡（およそ）吉原驛ヨリ五里
入テ　御山又五里出テ蒲原ノ驛ナリト聞シカト山道故（ゆえ）
イト遠クテ六里モアルラント所ノ者ハ云ヘリ　サスレハ十
二里ノ廻リ道ナレト吉原ヨリ蒲原迄三里ノ道ヲ追（おい）
込（こ）メハ凡（およそ）九里計ノ廻リ道ニモヤアルランカシ

終

諸堂を見学することを勧められたので、同師に従って客殿へ行き、御座替りの御本尊という、普通の御本尊とは違って右の方に日興上人の御名判があって、左の方に日目上人への授与の趣旨がしたためられた御本尊を拝した。

それから経堂・鐘楼・学頭寮・墓所など、その他残らず拝見して書院へ戻ったところ、吉村は盃を頂戴し食事も済ませて㉕御宝藏へ参詣（御開扉）するとのことであったが、光雲師の言われるには、「これから吉村氏が御開扉を受けられます。皆さん方もよい機会ですので今一度（御開扉を）受けられてはどうですか」と言われたので、三人とも御宝藏へ行き、二度目の御開扉を受けた。

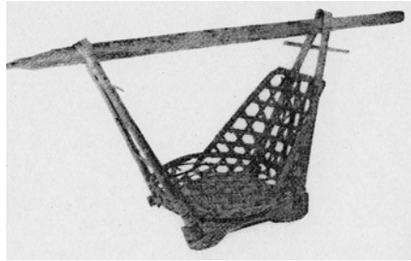
㉖それから吉村は光雲師の案内にて山内見学をし、自分たち三人は書院へ戻って寂日坊様、光雲師への贈り物や迎えに来てくれた人への心付けなどを用意し、やがて吉村も戻ってきたので、それぞれの方々に贈り物をお渡しし、再び寂日坊へ立ち寄った。ここで旅装束に改め、寂日坊様、光雲師にお別れの挨拶をして出発したのは昼前の頃であった。また、見送りの人を供に付けて下さったので、此の者と共に出発した。

㉗道中、夜中に通った時には駕籠に乗って眠ったまま来たのでよく判らなかったが、いまこうして歩いてみれば、大して難所というほどではないけれども、山また山といった風でもあり、なかなか案内人がいなくては紛らわしい道もあり、このような山奥にかくも素晴らしい霊場があるとは、誰が知ることが叶うだろうかと思われた。

㉘やがて八キロばかり進んだところで、駕籠に乗って来る者がいたので誰かと思って見てみれば今川という者（俗名三碩）であった。この人は、三島の本陣の勤めが忙しく、夜中に勤めを切り上げてこれから本山に参詣するとのこと。「今一人、永井という者（俗名久左ヱ門）が本陣の用事が済み次第参詣すると言っていたがどうしたのか」と聞いたところ、今川は「よく分からない」とのことであった。

㉙それから今川と別れ、案内の人も帰して、それから四人連れで足早に歩き、富士川の渡船場のところで東海道に入った。そして川を渡り、蒲原宿を通り過ぎて由比の旅籠に着いたときは午後六時頃だっただろうか、日が暮れるまでには少し間があった。楢葉、その他の人々も先に旅籠に着いていて、「浅間神社とはどのようなところか」と聞いてきた。そのように聞かれると思っていたので、本山から帰る途中で浅間神社へ立ち寄り、あらあら見てきたので、話をするにも都合がよかった。

㉚以上の道程は、吉原宿から二十キロ入って本山、また二十キロ出て蒲原宿と聞いているが、山道なので遠距離に感じられ、「二十四キロもあるように思える」と地元の者が言っていた。そうであれば、約四十八キロの廻り道であるが、吉原から蒲原まで（富士川渡船場で東海道に合流するまで）の十二キロの道矩を差し引きすれば、およそ三十六キロの廻り道ということになるだろうか。



※凡例
・丁数の変わり目には▼を付した。
・改行は原典に依る。
・難読の文節には半角をあけたが、全角の空白は原典に依る。
・ふりがなでひらがなは筆者・カナは原典に依る。

午前
0時－夜九ツ（子ノ刻）
1時－九ツ半
2時－夜八ツ（丑ノ刻）
3時－八ツ半
4時－暁七ツ（寅ノ刻）
5時－七ツ半
6時－明け六ツ（卯ノ刻）
＊日の出の30分前
7時－六ツ半
8時－朝五ツ（辰ノ刻）
9時－五ツ半
10時－昼四ツ（巳ノ刻）
11時－四ツ半

午後
12時－昼九ツ（午ノ刻）
13時－九ツ半
14時－昼八ツ（未ノ刻）
15時－八ツ半
16時－夕七ツ（申ノ刻）
17時－七ツ半
18時－暮れ六ツ（酉ノ刻）
＊日没の30分前
19時－六ツ半
20時－宵五ツ（戌ノ刻）
21時－五ツ半
22時－夜四ツ（亥ノ刻）
23時－四ツ半

参考：大江戸ものしり図鑑